

序に於て述べてみられるが、著者こそ我が國に於ける新學の「草分け」たるの榮譽を荷負はれるべきであり、數多の先哲の踏分けし勞苦の跡を身自ら親しく體驗された事であらう。

謎とも云ふべき遠き世の死語を外國語と云ふ障礙を遁して十年一日の如く研究に従事された著者の努力に對し只々敬意を表するのみである。

今や十數年前艱を分けた開拓者としての苦勞が結果して此の文典が世に公にせられるに至つた事は小にしては著者にとつて非常な御喜びであると同時に同學の者にとつても寔に御同慶に堪へない次第であるが、更に大にしては今や啓蒙の域を脱し既に特殊研究の時代に這入つたと云はれる我が西洋史學界にとつてもこよなき贈物であると云はねばならぬ。感々著者の御健在を祈つて止まない次第である。

立派な健かな種子が蒔かれたのである。此の種子が今すく／＼と生長し第二、第三の埃及學者が我が西洋史學界に活躍貢獻する日の來るのを待望するのみである。(菊判九〇頁、奈良飛鳥園發行定價金壹圓)(豊岡堯)

Gordon East: The Geography behind History, 1938.

イースト 歴史にひそむ地理 地圖六四、一九四頁

今日、世界の支配者となつたといふ人間の誇りは、今も洪水とか、飢饉とか、氷による破壊とか、移動する沙漠とか、廣範圍に

亘る土壤の浸蝕等があると思へば、眞に空虚なものに過ぎない。此等の事件は物質文明が高度に發達した地方に於てさへも、自然環境が今尚ほ「バンドラの箱」の儘、存在してゐる事を強調してゐる。況や、自然の舞臺に不十分な武裝をもつて立つてゐた人間歴史の初期に於て、如何に此等が大きな障礙であつたか。それ故にこそ、その初期に於ては屢々「歴史は凡て地理である」との言葉が存在してゐたのである。然乍ら、歴史にひそむ地理に對し、それが絶えず指導的役割を演ずると考へるならば過誤を惹き起す事とならう。從來、地理的決定論者は完全なる地理的干涉を信じたが地理學が爲し得る事は、單に地理的背景の特性が人間の行動の一部を局限し、且つそれに影響するに役立つといふ事だけに基礎を置き、地理學の方法と技術とによつて、人間活動の背景を研究することである。端的に言へば、地理學者は歴史を合成する要素の一つを研究するのであつて、歴史といふ綴織の糸の一本だけを見付けやうと主張するものではなく、その撚糸の一つを試べるに過ぎない。而して、此の事は、歴史事件は時間に於てと同時に空間に於て發生し、その特殊の分化を除いては場所から分離出來ず、且つ人間の思想や行動が、一定の地理的環境に於て種々の程度に人間の努力の性質や軌道を制限するといふ基礎に立つて始めて行ひ得る。歴史の地理的背景を此の如く理解する事によつて地理學は歴史研究の内容を富ましめ、又深めしめ得るのである。

右の如き見地に立つてイーストは歴史にひそむ地理を論ぜんとするのであるが、彼は先づ「自然環境」を問題とする。この自然環

境には自然そのものが含まれることは勿論であるが、尙ほ人間が變化せしめた環境をも、その中に含めしめる。次に、地理學の重要な概念の「地域」をとりあげ、「地域の特殊性」を重要視し、現在のそれを思考し、更に過去に迄それを展開し、歴史的過去の地表の多様性を反省する事によつて過去の環境を再現し、それを歴史の一文書たらしめ、地理學を歴史研究に役立たしめやうと意圖するのである。

次に本書の目次を掲げて紹介の責を了り度い。

- 一、歴史の文書としての地理
- 二、地理的位置
- 三、氣候と歴史
- 四、交通路
- 五、町
- 六、境界帶と境界線
- 七、産物と經濟
- 八、文明の黎明
- 九、歐羅巴と支那
- 文獻

南洋日本町の研究

岩生成 一著

著者岩生氏はこと難かし氣な史論を立てることが嫌ひらしい。それよりも孜々として史料を蒐め、その上に地道な建築をしてゆ

く肌 of 學者のやうだ。從來僅にケエル・ベリ氏その他の斷片的な作品しか持たなかつた南洋日本町の研究が、このやうな確實な學者の手に取りあげられたことは何よりもうつつけだつたと言へる。まして近世日本の海外交通史に關しては岩生氏が第一線に立つエキスパートであることは今更紹介するまでもない。

この書は著者が嘗て臺北帝大文政學部史學科研究年報に連載された舊稿を補訂して南亞細亞文化研究所から公刊されたもの、題名の示す通り近世初頭の南洋各地に作られた日本町に就いての考證である。章を交趾、東埔塞、暹羅、呂宋に分つてそれらと同様な體例の下にその發生、位置、規模、戶數、行政機構とその主腦人物並に在留日本人の軍事、經濟、宗教等各方面に亘る活動を叙べ、結論として日本町の名稱、特質、要因等が論述せられてある。本書の價値については何を措いてもまづその貴重な資料の豊かさを擧げねばなるまい。南洋日本町といふやうな好題目が未だ纏つた作品として現はれなかつたのは、海外に存する資料の蒐集が困難だつたことも慥かにその重要な一因だつたといへる。著者の始と貪婪だとも思へるこれら資料に對する嗜欲がこの困難を見事に突破させたことは、この書に引用された文獻の蒐集範圍が、本邦は勿論、ハーグ國立文書館の植民地文書をはじめ西歐、南洋の各地にまで及んで、多數の稀觀書や未刊の文書を網羅してゐるのもわかる。この書のどの一節の註記を開いて見ても、讀者はきつと古めかしい羊皮紙の臭ひに噓せかへることだらう。

著者の平明な筆は淡々としてこれらの資料を載せ、その物語

(朝永)